

二〇一一年度・学力考查問題【国語】

(中学第二回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は11ページで一・二・三の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。
また、特に指示のないかぎり、句読点なども一字に数えます。

——線あ～おのひらがなを漢字に直しなさい。

で、病室から漏れてくる母の声まで細つて聞こえた。
私は見えない水で顔でも洗うように両手で顔を拭うと、無理からに
なんじやないかね?」という母の声に踏み出しかけた足先を止めた。
「何言つてるんですか、お義母さん、貴志さんはそんなこと思つてないですよ、ははは」

劇団がかいさんする。

- 1 劇団がかいさんする。
- 2 日ごろからしつそな生活を心がける。
- 3 問題点をれつきよする。
- 4 キヤプテンのじゅうせきを果たす。
- 5 この街には高層ビルがりんりつしている。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子ども時代に母と貧しい生活をおくっていた「私(=貴志)」は、大人になつて裕福な生活ができるようになつた。母を温泉旅行や食事に連れて行つたり、贈り物をしたものの、母がいつも「もつたいない」と口にするところが気に入らず、ついきびしく当たつてしまふ。そんなある日、体調を崩して田舎の病院に入院した母の精密検査の結果を聞きに行くよう妹から頼まれた。そこで母の病気がかなり進行した胃がんであることを医師から告げられ、動搖した「私」は重い足取りで母の病室へ向かつた。

母の病室の前まで歩くと、出入口が開け放たれた部屋から、靖子と母の声が聞こえ、私はふと立ち止まつた。医師から告知をされたせい

「そうだといいけど……昔からよく叱られたし。なかなか帰つて来てくれることもないし」「たまたま忙しかつただけで、いつも気にかけてますよ」「あの子は気難いから、靖子さんみたいなやさしい人が一緒になつてくれてよかつた」

私は靖子と結婚したとき、靖子がこの田舎者の両親とうまくやつてくれるだらうかと心配した。が、むしろ、私より両親のことを気にかけてくれた。

「貴志さんは、口では冷たいようなことも言つてますけど『そろそろお袋の誕生日じゃないか?』とか『母の日はどうする?』なんて氣にしてますもの。私が贈つたことにしてくれるのも、その方が嫁としての私の株が上がるつて分かつてくれているんです。そういうところがある人なんですよ、素直じやないだけで。ホント、いい歳をして困つたもんですね、ははは」

靖子の笑い声にはほんの少し私の気持ちが癒される。¹

「昔ね、貴志が大学に行つてた頃、たまに帰つて来て、また東京に戻るとき、玄関で見送るんだけど、あの子、振り向かないで帰つちやうんだよね。それが淋しくて……」

「達也も最近はそんなところがありますから。でも、男の子はみんな恥ずかしいんじゃないですか？」

「靖子さん、あたしはね、あの子が結婚したとき、こんな言い方したら靖子さんのご両親に悪いんだけど、息子を取られちゃつた気になつと素っ気なく答えた。

梅丘に家を建てるとき、「これで、こつちには戻らないんだ

ね」と淋しそうに母が呟いたことを思い出す。

私はそのとき「婿養子に入るわけじゃないし、そんな顔をするなよ」と素っ気なく答えた。

トイレに向かう年老いた入院患者が、ゆっくり私の前をお辞儀しながら歩いて行く。

「靖子さん、その引き出し開けてもらえる?」
「この引き出しますか?」

靖子が引く引き出しのキツと擦れた音が聞こえる。
「その中に、赤い布袋があると思うんだけど」

「布袋ですか? あ、はい、ありました」
「中に、口紅があるでしよう?」

「はい」

「それね、あたしのお守りなのよ。貴志が小学生の……あれは四年生だったかな。母の日にくれたの」

「ま、貴志さんが」

「今度、授業参観に来るときは、それをつけて来てくれって言われたのよ。いつもあたしが見窄らしい格好ばかりしてたから、不憫になつたんじやないのかね」

口紅……。小学四年……。母の日……。

遠い記憶がその言葉に引っ張られるように、私の頭の中に浮かんできた。

そうだ。私が母に贈ったものだ。

小学四年のとき岡田明紀という級友がいた。

町には中心部に住む「町の子」と呼ばれた子どもたちがいた。大概是会社勤めや目抜き通りに店を構えるうちの子で、比較的裕福な家庭の子を意味した。その中でも明紀は普段からぱりっとした半ズボンと白いシャツを着ていた。

明紀の母親は、学校の行事で学校を訪れるとき、きちんと化粧をし、濃紺のスーツ姿でやつて来た。マセた女子の間では「明紀くんのお母さんは綺麗だ」という評判になつていた。

ある日、明紀が自慢するレーシングセットを見るために、数人の級友と町の高台にあつた明紀の家に行くことになった。

よく手入れされた垣根に囲まれた家も美しく感じたが、通された居間の整理整頓された様には驚かされた。ぎょろぎょろと見渡すと、テーブルの上には白いレースのクロスが敷かれ、革張りのソファが置いてあった。我が家には無縁の物ばかりだった。私は急に気後れし、慌てて穴の開いた靴下の先を引っ張つて隠した。

私の母は掃除が苦手というより、そういう能力が欠如しているので、はないとと思うくらい部屋の中は足の踏み場もなく物が散乱し、食卓として置かれたコタツは一年中、部屋から片づけられることはなかつた。

明紀の母親は、薄茶色のスカートに白いブラウスを着ていて、特別な日でもないのに化粧をしていた。その唇には口紅が塗られていた。「召し上がり」と、おやつに出されたイチゴのショートケーキを、慣れないフォークを使いこなせず横倒にしてしまい恥ずかしい思いをした。

随分経つてから人伝に聞いた話だが、明紀の母親は東京から嫁いできた人だつた。

子どもの淡い、いや愚かな願いだつたのかもしれないが、口紅をつければ私の母も明紀の母親のように綺麗になれるのではないかと思つた。

翌日、私は和泉屋へ自転車を走らせ、化粧品売り場で口紅がいくらするのか下見をした。ガラスのカウンターの上に、口紅は並べてあつた。私がへばりつくように見ていると、店員に怪訝そうな顔をされた。

私が予想していたものより遙か上の値段に落胆した。いつそのこと、隙を見て盗んでしまおうかとも思つたが、とてもそんな度胸はなかつた。

お年玉の残りでは足らず、何日か思い巡らせた結果、瓶集めを思いついた。当時、清涼飲料水の空き瓶を店に持つて行くと十円になつた。それからしばらくの間、友だちからの遊びの誘いも断つて、家に帰ると自転車を漕いで物色に出掛けた。

町工場が集まつた地区には、ブロック塀の上に、若い工員が返却を面倒がつて放置したコーラの瓶があつた。道端にはたんぽぽの花に混じつて、捨てられた瓶が土に突き刺さるように埋まつていた。それらを集めては水道の水で一生懸命汚れを落とし、それから商店へ持ち込み、換金した。

同じ店ばかりに持ち込むとヘンに思われそつたので、自転車の籠に幾つか積み込んで、離れた商店へも運んだ。

母の日の数日前、私は十円玉でパンパンになつたビニール袋を抱え、和泉屋へと向かつた。

店員のおばさんに「母の日のプレゼントにするんだ」と告げると、小銭を数えることも嫌がらず、綺麗な包装紙で口紅を包んでくれた。

私は母の日にその口紅を母に手渡し、次の授業参観は口紅をつけてきてくれと頼んだ。

母の目には見る見る涙が溜まり、母は私を抱きしめると何度も「ありがとうね、貴志」と言い、髪の毛がくしやくしやになるほど頭を撫でた。

私は子どもながらに、大きな仕事をやり遂げたような満足感と、感謝される喜びを初めて味わつた。

……そんな遠い記憶が、蘇つた。

貴志が買つてくれた口紅は、参観日に一度使つたきり、あとはもつたいくて使えなかつた……。でもね、ずっとあたしのお守りになつてるんだよ」

「お義母さん、それでよかつたんですよ」

「実はね、近所のお店の人から聞いてたの。あの子が、空き瓶を集め

てお金に換えてるつて。何でそんなことをつて恥ずかしい気がしたん

だけど、そのお金で口紅買つてくれたんだから、恥ずかしいなんて言つたら罰が当たつちやうところだつたね」

母は知つていたんだ……。今思えば、だから「これはどうやつて手に入れたんだ?」と尋ねることもしなかつたのだろう。

「淋しいときも苦しいときも、その口紅を見ると頑張れたの」
「お義母さん、泣かないで下さいよ。私、もらい泣きしちゃうじやないですか」

「ああ、ごめんなさいね」

病室の様子は見ることはできないのに、ふたりの表情が手に取るよう分かること

「靖子さん、ひとつお願ひがあるんだけど

「はい……」

「あたしが死んだときには、死に化粧にこの口紅を使つてもらえないかね?」

「何を言い出すんですか、もう」

「だから、もしものときには……。それと、こんな古い口紅、形見に残してもしょうがないから、一緒にお棺の中に入れてほしいの。そうすれば、あたしもいくらか淋しくないし。ねえ、だから靖子さん、お願いね、そうしてもらえる? 本当にお願ひね」

靖子に懇願する母の声に居たまくなつた私は後退りするようになその場を離れた。非常口の扉を開け外階段の踊り場へ出ると、胸に詰まつた重苦しさを全部吐き出し、深く大きく息を吸つた。

微かに赤味の残つた空に『夕やけ小やけ』のメロディーが流れ、晩

秋の冷たい風が鋸びた鉄柵の隙間から私の頬に吹きつけてくる。

気を落ち着かせようとし、上着の内ポケットから煙草を取り出すと、その一本をくわえた。ライターを添えたが、胃の方から咽び上がる感情に唇が震え、煙草は小刻みに上下し、うまく火が点けられない。くわえた煙草を右手で取り、そのまま掌の中でくしゃくしゃに握りしめると、もう一方の掌で、震える声を封じ込めるように口を覆つた。

贈つた本人さえ忘れていたたつた一本の口紅が、ずっと母の支えになつていたとは……。

少年だつた私の方が、何倍も母を喜ばせていたと思うと、急に今の自分がちっぽけな人間に感じられた。

ただ、贈り物も温泉も、母に喜んでもらいたかっただけだ。そして、そういうことができるようになつた私を「立派になつた」「よく頑張つた」と褒めてほしかつた……。

靖子が言うように、歳をとつて素直な気持ちを口にできなくなつたとしても、たとえどんなに冷たい態度をとろうと、子どもの、いや私の心根にはいつも、母に褒められたいという思いがあつた。

その場に座り込みうなだれると、大粒の涙が頬を伝い、ぼろぼろと足元に落ちてゆく。もうそれを止める術はなかつた。

(森 浩美『家族の言い訳』双葉社所収 「おかあちゃんの口紅」より)

- ※ 1 靖子：「私（＝貴志）」の妻。
- ※ 2 無理からに：無理に。
- ※ 3 不憫：気の毒。
- ※ 4 目抜き通り：人がたくさんいる通り。
- ※ 5 レーシングセット：車でレースをするおもちゃ。
- ※ 6 和泉屋：私の家の近くにあつたデパート。
- ※ 7 怪訝：そうな：不思議：そうな。
- ※ 8 物色：目的にあつたものを探すこと。
- 問一——線1 「靖子の笑い声に～癒される」とあります、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 母の今後が気がかりで暗い気持ちになってしまつたが、母と妻が楽しそうに会話をしている様子に、気持ちが救われたから。
- イ 母と妻の様子が気になつて隠れて病室の中を覗いたが、二人で楽しそうに会話している雰囲気と、母の思いのほか元気そうな様子に安心したから。
- ウ 母に冷たい態度で接している自分とは違ひ、母を大切にしてくれる妻の行き届いた気配りに感心し、今後は母の世話を全てまかせられると思つたから。
- エ 母の検査結果が非常に悪いものであつたことをどのように伝えるか悩んでいたが、母の前で自分の顔を立ててくれる妻を見て、介護のかいごのつらさを忘れられたから。

問一——線2 「『これで、こつちには～呟いた』とあります、この時の「母」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 住み慣れた実家を出て、独立しようとする息子の成長を素

直に喜べず、靖子との結婚を認められないでいることに、心苦しさを感じている。

イ 大切に育ててきた息子が、結婚によつて新しい家庭を作り、今まで育てた恩を忘れて自分を捨てようとすることに、さびしさを感じている。

ウ 長年一緒に生活してきた息子が、結婚して自分のもとから離れることになり、結婚相手に息子を奪われたようを感じている。

エ 結婚して新しい家庭を築く決心をした息子の意思を尊重したいが、今後は親子として二度と関わなくなるため、息子との別れを悲しく感じている。

丙 線3 「私は急に～隠した」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だらしない自分が、裕福で洗練された明紀の家に迷惑をかけていることが分かったから。

イ 田舎者で、靴下も買えない我が家の事情を明紀に知られてからかわれるのを恐れたから。

ウ 明紀の家と自分の家の暮らしぶりの違いに圧倒され、恥ずかしくなったから。

エ 我が家と明紀の家との格差に傷つき、母が恥をかかないよう見苦しい部分を見せまいと思ったから。

問四 ——線4 「私がへばりつくように見ている」とあります、

この時の「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おかあちゃんにきれいになつても、うつために、どうしてもあの口紅を手に入れたいなあ。

イ あの口紅をつければ、おかあちゃんも人前で恥ずかしくならず自信が持てるのになあ。

ウ おかあちゃんが明紀のお母さんのようにあの口紅をつければ、裕福になれるのになあ。

エ あの口紅をつけておかあちゃんが参観日に来てくれれば、みんな喜んでくれるのになあ。

問五 ——線5 「小銭を数えることも——包んでくれた」とあります

が、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが化粧品売り場に来たので驚いたが、買い物をするだけの所持金があることを知り、お客様として対応するべきと考えたから。

イ 必死にかき集めたと思われる小銭を見て、その男の子の努

力を感じ取り、母親への贈り物が少しでも高級品に見えるよう、外見だけでも美しく見せたいと考えたから。

ウ 男の子が口紅を買おうとする行動は理解できなかつたが、その真剣な様子に押され、喜んでもらえるようにできる限りの良い仕事をしたいと考えたから。

エ 母親への贈り物を買おうとして、子どもが一生懸命に口紅の代金を用意したこと想像し、その気持ちを大切にして協力したいと考えたから。

問六 ノ 線「それね、あたしのお守りなのよ」とありますが、「母」

にとつて、「お守り」であるこの「口紅」とはどのようなものですか。ていねいに説明しなさい。

た」とあります。が、「ここ」での「私」の様子の説明として適當なものを次の二つ選び、記号で答えなさい。

ア 私は大人になるにつれて、次第に母への愛情を失つていつたが、母の死が目前に迫つたことで愛情がよみがえり、何とか最後まで母につくし続けようとしている。

イ 子どもの頃に贈った口紅を母が今でも大切に持つていたのを知つたことで、大人になつた現在の自分はむしろ母を苦しめているのだと思ひ、いたたまれなくなつてゐる。

ウ 大人になつた私は母に色々とつくしてきたが、自分が贈つたことすら忘れていた口紅に、いまだに愛着を持ち続けてゐる母の思いの深さに心を打たれた。

エ 口紅を買うための私の努力を知つてゐるにもかかわらず、死後のこと妻に頼んでいる母に激しい怒りを感じ、その場にはいられなかつた。

オ 母の病状を知つた私は、妻と死を意識している母との会話を聞いて動搖し、その場にいられなくなつたが、何とか落ち着きを取り戻そうとしている。

筆者・隈研吾は2020年に開催予定であった東京オリンピックに向け、新たに建設された国立競技場（2019年11月完成）の設計者である。

僕らがもうひとつ大事にしたのは、建物と森とをつなぐことである。建築の内と外とをつなぐというのは、20世紀建築の大きなテーマであった。石やレンガを積んで厚い壁の建築を作るやり方から、コンクリート、鉄の柱、大判のガラスを組み合わせて作る開かれた建築への転換が、20世紀初頭に起つた。ガラスを多用した、その透明な建築スタイルは、モダニズム建築と呼ばれ、人々を熱狂させた。建築家も建設業界もガラスの箱の大キャンペーンを開始したのである。人間はガラスによつて再び自然とつながつたと、狂喜したのである。

そのようなガラスの箱を縦に積み重ねた超高層ビルは、20世紀の都市のシンボルとなり（たとえばミース・ファン・デル・ローベとフィリップ・ジョンソンのシーグラムビル、1958）、新しい時代の新しいワークスタイルやライフスタイルの象徴ともなつた（I 新宿の超高層ビル群）。郊外という新しくできた「素敵な環境」に暮らしがラスのタワーで働くというのが、最もかつこいいとされたのが、20世紀という時代であり、工業化社会という文明であつた。

その大きなガラスは、本当に内と外をつないでいたのだろうか。

二

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

そのようなガラスの箱を縦に積み重ねた超高層ビルは、20世紀の都市のシンボルとなり（たとえばミース・ファン・デル・ローベとフィリップ・ジョンソンのシーグラムビル、1958）、新しい時代の新しいワークスタイルやライフスタイルの象徴ともなつた（I 新宿の超高層ビル群）。郊外という新しくできた「素敵な環境」に暮らしがラスのタワーで働くというのが、最もかつこいいとされたのが、20世紀という時代であり、工業化社会という文明であつた。

Ⅱ 視覚的には、内と外はつながっていて、ガラスの箱の中からも、外の景色を眺めることができた。外を歩く人々も、内で何が起こっているか、大体察することはできた。

〔三〕、実のところ、内と外は、少しもつながっていなかつた。むしろモダニズム建築によつて、このガラスの箱によつて、自然と人間とは決定的に切斷された。内部の環境、すなわち室内環境は、膨大なエネルギーを消費する空調機システムによつてしか、制御できなかつたからである。その空調機を廻し続け、その箱の中の照明器具をともし続けるために、石油を垂れ流し続ける必要があり、安全性も不確かな原子炉を廻し続ける必要があつたのである。そのガラスの箱と郊外を通勤するために発明された自動車という道具も、石油の垂れ流しに支えられ、走り廻っていた。それが、20世紀という時代の正体であり、ガラスの箱の正体だったのである。

アメリカで発明されたこのシステムは、あつという間に世界に伝播し、第二次大戦後の日本は、そのシステムを最も見事に学習した。²日本は20世紀システムの優等生であつた。

このシステムの破綻を、決定的な形で人々につきつけたのは、2011年3月11日の、東日本大震災であった。³20世紀の人類が築き上げてきたシステムが、いかにもろく、いかに傲慢であったかを、大地震と大津波とが、われわれに教えてくれた。最高の優等生が、最ももろかつたというのは、歴史の皮肉とも、必然とも感じられる。

20世紀の人類は、コンクリートと鉄とガラスを使って、人工的な箱を次々と建設し、増殖させ、世界を覆いつくした。このガラスの箱は、工業技術の力によつて万全な強度を持ち、人工的な空調システム、給

排水システム、照明システムによつて、人間に完璧な環境を提供する——完璧な箱であると、人々は確信し、うぬぼれていたのである。しかし、自然という大きなりアリティの前では、このガラスの箱は何物でもなかつた。この箱を支えていたはずの原子力のシステムも、大きな波に洗い流されて機能を失い、機能を失つただけではなく、放射能を周囲に撒き散らした。

20世紀というシステム、工業化社会というシステムが、そしてその象徴であったコンクリートとガラスと鉄でできた箱が、いかに傲慢で無力であつたかを、われわれに、つきつけた。

2020年のオリンピックの会場となる国立競技場は、3・11がつきつけたものをしっかりと受け止め、反映したものにしなければならない。ガラスによつて内と外をつなぐというのは、そのシステムで利益を得ているインフラ産業、建設産業が考へ出した工業化社会のフィクションである。

ガラスによつて、内と外とを区画するのではなく、大きな庇を張り出すことによつて、涼しい風の通る、気持ちのいい内部を作り出そうと、僕らは考えた。庇によつて守られたその場所は、もはや内部と呼ぶ必要もない。それは内部でも外部でもなく、ただ人間という弱い生き物が、自然というとてつもなく大きく厳しいものの中でのだましだまし、なんとかギリギリ暮らしていくことのできる、ささやかな場所なのである。

そもそも、そのような考え方、そのような自然観に基づいて、日本の建築物は作られてきた。たび重なる地震、災害が、自然というものの大きさ、強さ、そして人間というものの弱さ、はかなさを日本人に

叩き込んできた。□IV、日本人は、閉じた箱を作らうとせず、庇や縁側といった曖昧な装置を使って、自然に開きながら、自然の美しさを身体で感じながら、自分達のささやかな場所を確保してきたのである。

2020年の国立競技場のデザインのベースになつてているのは、この日本の知恵、諦め、謙虚さである。

大きな庇を重ねることで、弱い人間を守るというのが、新しい国立競技場のデザインの基本的な発想である。箱に閉じ込めて、人間を守ろうとする、その箱の環境を維持するために、さらなる人工的なシステム（たとえば空調、照明）を構築しなければならず、そのシステムを維持するために、莫大なエネルギーが必要となる。無理なシステムの上にさらなる無理なシステムを重ねなければならず、嘘の上に嘘を重ねなければならない。その結果、地球という繊細な場所、繊細なバランスは破綻してしまつ。

箱のかわりに、庇を重ねてできる新しい国立競技場では、風と光の計算が極めて重要になる。日本人は昔から、風と光を上手に取り入れ、あるいは上手に防ぐことで、自分のまわりの環境を守ってきた。どの季節にはどのような風が吹き、どの季節のどのような時間には、どのような光が射すかを計算しながら、庇の深さ、高さ、形状を決定してきたのである。

隈研吾『ひとの住処』(新潮社より)

※1 モダニズム：伝統を否定し、常に新しさを求める傾向。

※2 ミース・ファン・デル・ローエ：ドイツの建築家。次のフイ

リップ・ジョンソンはアメリカの建築家。

※3 シーグラムビル：ミースとフイリップが設計し、1958年に建てられたガラス張りが特徴のニューヨークの高層ビル。

※4 リアリティ：ここでは「現実」という意味。

※5 インフラ：道路や上下水道など経済活動のもとになるもの。

※6 フィクション：作り話。

問一 □I → □IVに入る言葉として最も適当なものを次の中から

それぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号を一度使ってはいけません。）

ア だから

イ しかし

ウ たとえば

エ 確かに

問二 ——線1「自然と人間とは決定的に切斷された」とあります
が、その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答
えなさい。

ア 石やレンガを使った建築では自然を感じられたが、ガラスを使った建築では、人間にとつて自然はただ眺めるだけのものになつた、ということ。

イ 人間が生きる環境は自動車や原子炉などの人工物であふれてしまい、自然と呼べるもののが完全に失われてしまった、ということ。

ウ 建物内の人間の生活が人工的なシステムで支えられている

だけでなく、そのシステムを維持していくこと自体への大きな危険性が伴うようになった、ということ。

エ 室内環境の維持を空調機などの人工的なシステムに頼るあまり、人間は厳しい自然の中で生きる力を失ってしまった、ということ。

問三 線2 「日本は（）優等生であった」とありますが、筆者は「日本」のどのような点を指して「優等生」と表現しているのですか。その説明として最も適当なものを次の（）から選び、記号で答えなさい。

ア アメリカから学んだガラス張りの建築方法を用いて、20世紀に最もかつてないとされたライフスタイルを実現し、その方法を世界に広めた点。

イ 建物の内外の壁を取り払うという20世紀建築の課題を、ガラスの箱を積み重ねる新たな手法で克服し、その手法をアメリカとともに主導してきた点。

ウ アメリカが発明したガラス張りの建築方法は、人間と自然とを切り離すものだったのに、人間と自然とをつなぐものだと考えてその方法をひたむきに実行しようとした点。

エ ガラスを使った建築には、多大なエネルギー消費が必要となることを知りながら、そのアメリカの建築方法を価値あるものとして一心に学んだ点。

問四 線3 「最高の優等生が（）感じられる」について。

(1) 「歴史の皮肉」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自然と人間とをつなぐための建築を20世紀の人類は目指したが、それは当然地震や津波などの自然現象を排除するものではなかつたため、自らの建築が意図せず災害を招いてしまつた、ということ。

イ 20世紀の人類が生んだ建築は、空調などの人工的なシステムによってはじめて成り立つものであるため、自然と人間とをつなぐという考え方がそもそも無意味であつたことが明らかになつてしまつた、ということ。

ウ 自然との調和を求め、20世紀の人類は完璧な建築システムを作り上げたのに、そのシステムは逆に自然を遮断するものとなり、これまで自然と人間との間には存在しなかつた対立を生み出してしまつた、ということ。

エ 20世紀の人類は、厚い壁からガラスを使った建築へと転換し、人間と自然とをつなぐことを目指してきたのに、その目標とは正反対の結果を招き、自らの建築システムの誤りが露わになつてしまつた、ということ。

(2) また、「最高の優等生が、最ももろかった」とあります、が、

その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の技術を超えた強大な力を持つ自然について深く想像

せず、自らの技術が完璧だと過信していたから。

イ 3・11ほどの自然災害を経験したことがなく、建物の強度の設定が不十分であったと言わざるえないから。

ウ 自然との調和を求める建築には反対する理由がなく、行き過ぎた技術開発を社会が監視してこなかつたから。

エ 万全な強度の建物だと自負していても、自然とつながるためのガラスは素材としては弱いものでしかないから。

問五 線4 「底に（）もはや内部と呼ぶ必要もない」とあります、が、なぜ「内部と呼ぶ必要もない」のですか。その理由として

最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 底によって風を通した国立競技場は、内と外をつなぐという20世紀建築のテーマを実現したから。

イ 国立競技場の底は、20世紀建築におけるガラスとは異なり、空間を内外に区分けするものではないから。

ウ 風と光を取り入れ、様々な表情を見せる国立競技場は、内と外との境界を決めることができないから。

エ 自然の風と光を生かした国立競技場は、人工的な空調や照明を必要とする室内特有の暗さがないから。

問六 線5 「底や縁側といつた曖昧な装置」とありますが、これらのはどのような役割を果たすと筆者は考えていますか。ていねいに説明しなさい。

ア 本文全体をふまえ、「国立競技場」を設計した筆者の考え方の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ ガラスを使った20世紀建築は、人間を建物内部に閉じ込めるとも内部とも言えない曖昧な空間を持つ日本家屋だけであり、国立競技場はその伝統的な日本家屋の構法を世界に知らしめるものでなければならない。

ウ 原子力システムは人間社会を破壊するものにすぎないことが3・11で明らかになった以上、国立競技場は、原子力などの人工的なシステムを人間が完全に手放すべきことを訴えかけるものでなければならぬ。

エ 人間に完璧な環境を提供するという20世紀建築の考え方は思ひ上りであるため、国立競技場は、人間が小さな存在であることを自覚し、自然の中で生きる場を摸索してきた日本的な知恵を示すものであるべきだ。

三

問

一
I



II



III



IV



問

二



問

三



問

六



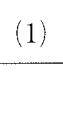
問

七



問

四



(1)



(2)



問

五

